

放射線治療看護の体系化に向けた 看護研究の現状と課題

Current status and issues of nursing research toward systematization of radiation therapy nursing

岩波 由美子

Yumiko IWANAMI

広島県立広島がん高精度放射線治療センター

Hiroshima High-Precision Radiotherapy Cancer Center

放射線治療の現場では、専従看護師が配置されていない、他部署との兼任配置、もしくは配置自体がない施設も多い。入院病棟看護師は副数人での共同研究が容易だが、多くの放射線治療部門では、共同研究者・研究時間の確保が困難である。また、放射線治療は限られた施設でのみ実施されており、がん看護研究の中で放射線治療看護の占める割合は20%程度と少ない。その結果、エビデンスある放射線治療看護の確立が遅れてきた。

しかし研究報告は徐々に増加している。寺岡は過去の放射線治療看護に関する文献を調査し、1998年から2002年の5年間では4件、2003年から2007年の5年では31件、2008年から2012年では67件が確認されたと報告している。しかし、原著論文は21件のみと少なく、現在、放射線治療看護は基礎を確立する段階にある。

これまでの研究では、事例研究や自施設内での実践的取り組み結果の報告が多かった。これらは患者特性を含めて多角的に検討されており、次の仮説検証・評価研究へと繋がる。臨床看護師が第一筆者の研究は約80%であり、現場での問題意識から具体的・建設的な研究課題が多く提示されている。体系化へ向け研究を継続することや、広く共有するために原著論文とすることも望まれる。

量的研究は増加しているが、研究課題や仮説が不明確なものや、サンプル数が統計処理には不適切なものが多い。また、各単独変数での比較検討が多く、要因分析においても多変量解析を用いたものは少ない。その他、放射線治療に伴う影響は、各施設の治療機器・治療計画装置や、患者の治療方針・病態によって個々に異なるが、これらの技術的視点を含めた検討は少ない。有害事象に関する研究においては、照射野・線量分布・処方線量などによって、有害事象リスクは変化するため、各施設の放射線治療の特性に応じて対象群を設定する必要がある。患者個人の因子も多種多様であることから、質的研究も重要であり、かつ多変量解析も含めた量的研究との両側面からの検討が望まれる。

最近では、研究・教育機関と臨床との共同研究の機会が増加している。また、放射線治療部門内の他職種と共同することで、医学物理・放射線治療技術分野からの視点を強化され、より論理的な検討ができる。かつ、その特性を明確に示すことで、他施設でもそれぞれの治療特性を加味して応用できる。今後は、これらの他部門・他専門職との共同研究により、エビデンスに基づく放射線治療看護の基礎が構築され、継続された研究成果の蓄積によって体系的な放射線治療看護の確立が期待される。